

Paternal and maternal bonding styles in childhood are associated with the prevalence of chronic pain in a general adult population: the Hisayama Study

安野, 広三

<https://doi.org/10.15017/1670400>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



(別紙様式2)

氏名	安野 広三			
論文名	Paternal and maternal bonding styles in childhood are associated with the prevalence of chronic pain in a general adult population: the Hisayama Study			
論文調査委員	主査 九州大学 教授 外須美夫 副査 九州大学 教授 神庭重信 副査 九州大学 教授 馬場園明			

論文審査の結果の要旨

慢性疼痛の発症において、虐待などの特殊な幼少期の嫌悪的体験が危険因子である可能性がこれまでの研究で示されている。しかし、幼少期の両親の養育スタイルと慢性疼痛との関連は、これまでほとんど検討されていない。

申請者らは久山町研究として日本の一般成人760人（久山町住民）を対象に、6ヶ月以上持続する疼痛の有無を調査した。対象者に両親の養育態度を評価する自記式質問紙である Parental Bonding Instrument (PBI) と現在の抑うつ症状を評価する Patient Health Questionnaire-9 を実施した。PBI はケアと過干渉の下位尺度からなり、その組み合わせで両親の養育スタイルを4つに分類した（適切な養育：高いケアと低い過干渉、無関心：低いケアと低い過干渉、ケアと過干渉：高いケアと高い過干渉、冷淡と過干渉：低いケアと高い過干渉）。ロジスティック回帰分析を用いて、両親の養育スタイルが慢性疼痛を有するリスクにどの程度寄与しているか、背景因子で調整し検討した。全参加者の慢性疼痛の有症率は46.3%だった。疼痛強度の中央値は40mmだった。慢性疼痛を有するオッズ比は、適切な養育群に比べて、冷淡と過干渉群で父親（オッズ比：2.21, 95%信頼区間：1.50-3.27）、母親（オッズ比：1.60, 95%信頼区間：1.09-2.36）とともに有意に高かった。抑うつ症状を調整後は、父親のみ有意であった。本研究の結果により、幼少期の両親の養育スタイル（とくに冷淡で過干渉）は一般住民における成人の慢性疼痛の有症率に関係し、その関係は父親の養育の方がより強いことが示された。

本研究は、幼少期の両親の養育スタイルと成人後の慢性疼痛の関連を明らかにしたものであり、極めて意義あるものである。本論文についての試験はまず研究目的、方法、結果の解釈などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについてもおおむね適切な回答を得た。

よって、調査委員会議の結果、試験は合格と決定した。